高知県立文学館ニュース

Kochi Literary Museum News

高知県立文学館

藤並の森

vol.96
2022.03

大町桂月詩碑（提供：湧別町観光協会
/出典：「全国観るなび（運営：（公社）日本観光振興協会）」）

サロマ湖畔に建つ大町桂月詩碑の全景
（提供：湧別町観光協会）

リレー随筆

旅する巨人

志水辰夫

東京では東池袋に長いこと住んでいた。アパートの前が雑司ヶ谷墓地で、よく散歩をした。墓地が大好きなのである。

だからここに大町桂月の墓があることは、早くから知っていた。

六十をすぎて北海道へ行き、札幌に八年住んだ。新車を買ったばかりだったから楽しくて、道内の隅々まで走り回った。

そのときいちばんびっくりしたのが、行き着く先々に桂月の足跡が残っていることだった。えっ、こんなところにも、と驚嘆するほどの僻地まで足を運んでいた。

日本最大の汽水湖であるサロマ湖は、両岸から延々砂嘴が延び、先端のわずか数十メートルが開いている。

東岸の先っぽに桂月の石碑が建っていた。砂洲に広がる原生花園を激賞し、そこへの道を龍宮街道と命名したとある。

車でビューッと行けた時代ではない。草鞋履きでひたすら歩く旅だったのだ。

層雲峡側から大雪山の黒岳に登ると、向かいにこんもり盛り上がった山塊がある。ご来光と三百六十度の眺望で知られるこの山には、桂月岳という名がつけられている。

層雲峡の名を天下に知らしめた桂月を顕彰して、地元の人たちが贈った山名なのである。

旅を愛し、旅に生きた桂月は、奥入瀬の蔦温泉で没している。

この地が気に入り、本籍まで移すほどの惚れ込みようだったが、建てていた庵に住むことは叶わなかった。

分骨を納めた墓はいまもそこにある。

じつは結婚して知ったことだが、妻の母つまり義母が桂月の姪だった。祖母が大町家から来ていたのである。

年がちがいすぎていたせいだろう、生前の交流はそれほどなく、晩年に帰省したとき抱かれ、膝に載せてもらったことしか覚えていないという。妻に至っては、そういえば大町のおばさんという人がいたくらいの記憶しかない。

蔦温泉には夫婦で行った。

足下に敷き詰めた木の床の間から、ぷくぷくと湯が立ち昇ってくる「源泉湧き流し」の温泉である。

宿を見下ろしている墓に詣で、妻が挨拶代わりのオカリナを吹いてきた。

（作家）

旅と文学展を開催しています

～旅する高知の作家たち～

多くの人が旅に惹かれるのは、日常から非日常へと出かけた先で様々な人や異文化に出会うという体験を通して、自分自身の輪郭が浮かび上がってくるからではないでしょうか。旅は自分と向き合う時間であり、自分自身との出会いの物語ともいえます。

作家たちも旅に出かけ、旅の中で目にした風景や人々との出会い、体験した出来事や感じたことなどを見聞録に記し、また、物語としての文学作品を生み出してきました。

この展覧会では、高知出身や高知ゆかりの作家の作品を旅というテーマからひもときます。

■第一章
作家からのメッセージ
～旅に関する言葉・名言より～

作家たちは、作品の中で旅についての言葉を残しています。ぜひ、お気に入りの言葉を見つけてください。

■第二章
物語として描かれた旅

旅の物語を5つのテーマからひもときます。例えば、主人公の成長の物語『あつおのぼうけん』(田島征彦・吉村敬子作)や、人生そのものを旅になぞらえた物語『旅猫リポート』(有川ひろ著)など、それぞれのテーマに沿って作品を紹介します。

■第三章
見聞録などに記された旅

作家たちは、旅の途中で、あるいは旅先で、どのような出会いを得てどのような体験をしたのでしょうか。「剣山行」(田中貢太郎著)や『ポケットに手をつっこんで 私は異国の町を歩く』(田岡典夫著)など旅の見聞録を7つのテーマからひもときます。

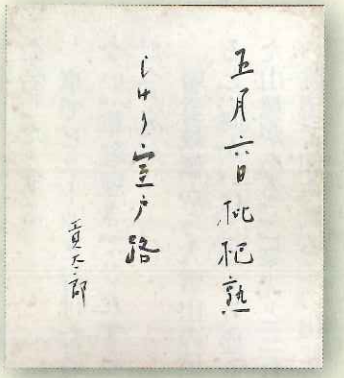
■第四章
それぞれの旅
～旅はいつでもどこでもできる～

本は旅への入口です。読書そのものが旅になるような作品『本の旅に出よう』(嶋岡晨著)とともに、旅の可能性を探ります。

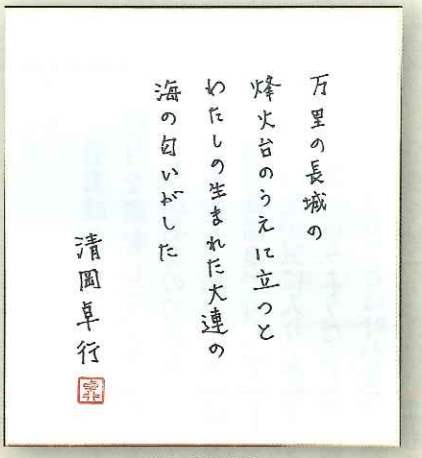
そのほか、高知を舞台にした旅のミステリーの紹介や、高知をもっと旅したくなる本のコーナー、旅に持って行きたい1冊をご来場の皆様に書いていただく参加型コーナーなど、旅する気分を満喫していただける仕掛けを様々ご用意して皆様をお待ちしています。

この展覧会を通して、文学作品に記された"旅"に触れ、文学の旅の世界を自由に楽しんでいただけたら幸いです。

(学芸課／道脇夕加)



田中貢太郎色紙



清岡卓行色紙

田岡典夫草稿「虎の口」

幸徳秋水展

こうとくしゅうすいてん

展覧会
レポート

幸徳秋水展、閉幕しました。

高知県四万十市出身の自由民権家・ジャーナリスト・思想家である、幸徳秋水の生誕150年を記念した企画展「生誕150年　幸徳秋水展」が、秋水の命日である1月24日（月）、閉幕となりました。

今回の展覧会では、秋水が残した漢詩や著作に主軸を置き紹介したほか、ジャーナリストとしての活躍にも焦点を当てました。陶淵明や荘子を好んで読んだとされる秋水は、自身も漢詩に造詣があり、8歳という若さで最初の漢詩を詠んだとされています。その後も、渡米時の船中や大逆事件の獄中でも漢詩を書いています。また、幼時から本を耽読しますが、それは師・中江兆民の書生時代や獄中でも変わらず、晩年には、平出修から贈られた雑誌「三田文学」を愛読したようです。また、名文家として活躍した秋水でしたが、絵を描くことも好んだという意外な一面もあり、秋水自筆の落書入り教科書などが残されています。

展示資料では、秋水が朝報社時代に記した日記「時至録」（専修大学図書館蔵）や、大逆事件で刑死した管野スガが秋水の無実を訴えるために書いた針文字書簡（杉村楚人冠記念館蔵）、田中正造に請われて書いた天皇への直訴状（佐野市郷土博物館提供※複製）にも注目いただきました。

会期中には、幸徳秋水・大逆事件等研究の第一人者・山泉進先生の記念講演会を開催。ふるさと・高知での開催ということもあり、多くの関係者やファンの方々が参加してくださいました。そして、最終日には追悼イベントとして、ドキュメンタリー映画「100年の谺　大逆事件は生きている」の上映と、缶バッジ等プレゼントイベントを開催。熱心なお客様が閉館直前まで、じっくりと展示をご覧になられていました。

四万十市郷土博物館をはじめ、山泉進先生や専修大学図書館など、多くの関係機関・関係者の皆様に支えられ、無事に閉幕を迎えた「生誕150年　幸徳秋水展」。心より、お礼申し上げます。自由、平等、平和を叫び続け、最期まで筆を振るった秋水の人生の輝きを感じていただけたなら幸いです。

（学芸課／野々村昭美）

会場の様子

学芸員のおすすめ本

吉井勇の旅鞄 ～昭和初年の歌行脚ノート

細川光洋 著

短歌研究社
2021年11月発行

吉井勇は「かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる」「先斗町のあそびの家の灯のうつる水なつかしや君とながむる」など祇園の花街を詠んだ伯爵歌人として、また、～いのち短し恋せよ乙女～と松井須磨子の歌で人気を博した「ゴンドラの唄」の作詞者として知られています。短歌を中心に戯曲、小説、随筆、歌謡など多角的な活動で多くの作品を残しており、いずれの作品も平明な、艶のある調べで、哀愁を帯びた抒情性をもって人々の心に迫ってきます。

しかし、勇は主要な結社を持たず、歌壇から距離を置いていたこともあり、永く「忘れられた歌人」でした。

著者は、2006(平成18)年に高知に赴任し、勇と出会い、2010(平成22)年から4年間「短歌研究」に「吉井勇の旅鞄―昭和初年の歌行脚」を掲載しました。著者の来高を待ちかねていたかのように次々と新資料が掘り起こされ、忘却の歌人は、再び日の目を見ることとなります。

昭和のはじめ、勇は奔放な妻徳子の「不良華族事件」のスキャンダルから逃れるように、西日本各地を行脚し、訪ねた土地土地で歌を詠み、高知においても約1000首の歌が詠まれています。

昭和8年には、四国の宇和島、松山から高知に入り、高知県南部の山中に位置する香北町猪野々(現在の香美市)を訪れ、翌年には、この地の草庵「渓鬼荘」に移り住みます。

はじめて明かされる長い漂白と隠遁の日々。著者は、勇の晩年の円熟した境地に至るまでを、貴重な資料を通して丹念に追っており、これらの資料からは、知られざる壮年期の勇の動向がはっきりと見えてきます。

吉井勇研究の第一人者が綴った評論集ともいえる1冊。是非、ご一読ください。

(学芸課長／津田加須子)

籍書紹介

寺田寅彦「藤の実」を読む

山田功・松下貢
工藤洋・川島禎子 著

窮理舎
令和3年12月発行

寺田寅彦の随筆「藤の実」は、寺田邸の藤の実の一斉爆発、上野の銀杏の一斉落葉、そして家族の事故などの一連の出来事を通して、物事の偶発する「潮時」について考察した短い作品で、昭和7年2月に雑誌「鐵塔」に発表されました。本書は「藤の実」を物理学、植物学、文学から現代的な視点で読み直し、その本質を問い直したものです。

藤の詳細な観察と実験に裏打ちされた山田功氏の読解、「まえがき」も担当された松下貢氏の、複雑系の観点から語られる偶然と必然のはざまへの考察、工藤洋氏の植物の仕組みの解説と自然科学の基礎への言及、細川光洋氏の詳細な注釈は、いずれも大変刺激的で知的好奇心をかきたてられ、そのたびに「藤の実」を読み直しては全く新しい読み方ができることに驚かされました。川島は文学の立場から寅彦の自然観に言及しましたが、何気ない寅彦の随筆に深い気づきと現代でも古びない感性の鋭さがあることを改めて感じました。

藤の花をイメージした美しい装丁は、『寺田寅彦『物理学序説』を読む』と同じシリーズとして、その形態を引き継ぎつつ、華やかで新しさを感じさせるよう工夫されています。

付録として、寅彦の藤の実の論文にも名を連ねる共同研究者の平田森三が寅彦の研究を子ども向けに解説した「藤の莢の不思議な仕掛」や、「藤の実」に関連する寅彦の随筆などを収録しています。

豊富な写真が掲載された口絵では、山田氏が苦心して撮影された藤の実の弾ける瞬間などの写真のほか、高知県立文学館が所蔵している寅彦の論文草稿・メモの写真があります(このメモは、前述の平田の著作にも一部使われています)。また表紙カバーを外すと寅彦の筆跡が図版になっています。当館でもなかなか展示しない資料なので、手に取った際はぜひカバーを外して見てみてください。

(学芸課／川島禎子)

土佐文学さんぽ 94

河田小龍著「漂巽紀略」の記録文学性

谷 是

河田小龍の「漂巽紀略」は、一種のノン・フィクション文学の"元祖"と言って良い。単に紀行文をまとめたというだけではない。絵はふんだんに付いており、リアルなストーリー性に満ちている。嘉永五年（一八五二）七月アメリカからジョン万次郎が帰国。高知城下・堺町の旅館に着いたが翌日から藩庁に出て、取り調べが始まった。一方は日本語を忘れている、他方は英語がわからない。当初は困難を極めた。藩政吉田東洋は、小龍の父・土生玉助の上司で、船奉行を務めた人。小龍を熟知していた。『あれは、長崎でオランダ語を学んで来た。英語も多少はわかるだろう』という推測であった。それに絵で補足もできる。小龍は呼び出されたが『これは時間が足らぬ。万次郎を自宅に寝泊まりさせ、朝晩に聞き書きをする』という認可をもらい、土佐橋の元「墨雲洞」での四ヶ月程の悪戦苦闘が始まった。一つ一つの単語から理解しなければならない。"丁々発止"の対話であったろう。その中から生まれたのが「漂巽紀略」。後に山内容堂の手で江戸の幕閣に贈呈され、廻し読みの型で、閲覧された。それが日米開国に大いに寄与したことは周知である。

同書は各種流布本があり、一部はアメリカにも渡り、研究も乏しかった。「漂巽紀略―付・研究・河田小龍とその時代」（高知市民図書館）（昭和六十一年三月）などで読むことはできたが、近年（二〇一八年）「漂巽紀略・全現代語訳　ジョン万次郎述、河田小龍記―谷村鯛夢訳・北代淳二監修」（講談社・講談社学術文庫）が発刊されたことは真によろこばしい。現代訳が文庫本で読めることは、入手しやすく、小龍の記述にある文学性をも、十分に感得できる。あのような難局時にあって、語る人間、聞き取る人間の迸る情熱が、行間にあふれている。生々と当時の世界の一端を表現した"稀有な記録文学"とも言えよう。

（郷土史家）

高知市はりまや町（旧南はりまや町）
土佐橋の元にある、河田小龍生誕地・墨雲洞の跡。
ここで「漂巽紀略」は生まれた。

資料受贈報告

寄贈資料から

『パンどろぼうとなぞのフランスパン』
柴田ケイコ作　KADOKAWA刊
令和3（2021）年11月　32頁
柴田ケイコ氏寄贈

柴田ケイコさんは、高知県生まれ・在住のイラストレーター兼絵本作家です。平成28（2016）年に『めがねこ』で絵本作家デビュー後、『おいしそうなしろくま』『ぽめちゃん』『ぱぱんがパン！』など人気作を生み出しています。

「どろぼうだけど、みんなに愛されるキャラクターをつくりたい」、そんな気持ちで構想された『パンどろぼう』は、第11回リブロ絵本大賞、第1回TSUTAYAえほん大賞など数々の賞を受賞。シュールでインパクトのあるそのキャラクターとは裏腹に、チャーミングで憎めない存在の「パンどろぼう」シリーズは、累計50万部を突破する大人気の絵本となり、たくさんの人に愛されています。

今回ご寄贈いただいた『パンどろぼうとなぞのフランスパン』は、「パンどろぼう」シリーズの第3弾です。世界一のパンを探し求める大どろぼうだったパンどろぼう。今では、パン屋のおじさんに諭されて立派なパン職人になりました。年に一度のパンまつりを前におおはりきりのパンどろぼうですが最大のピンチが到来します。

思わずパンが食べたくなる「パンどろぼう」シリーズには、たくさんの美味しそうなパンが登場するのも魅力の一つです。（第2弾の『パンどろぼうvsにせパンどろぼう』には、高知県のご当地パン"ぼうしパン"も登場しています）。ご家族で「どのパンが好き？」と話しながら読むのも楽しい1冊です。また、当館では令和5（2023）年2月から「柴田ケイコ展」を開催する予定です。こちらの企画展もぜひご期待下さい。

（学芸課／山崎真理）

受贈報告

（令和3年11月～令和4年1月）敬称略

▼**西田勝・平和研究室**・「田岡嶺雲論集成　西田勝著　法政大学出版局刊」
▼**柳広司**・「太平洋食堂　柳広司著　小学館刊」
▼**岸本尚毅**・「文豪と俳句　岸本尚毅著　集英社刊」
▼**松下貢**・「統計分布を知れば世界が分かる　松下貢著　中央公論新社刊」
▼**小松弘愛**・「民衆詩派ルネッサンス 実践版－一般読者に届く現代詩のための詩論　苗村吉昭著　土曜美術社出版販売刊」
▼**左山遼**・「真冬のレクイエム　左山遼著　リーブル出版刊」
▼**宮地由為子**・「認知症介護記　宮地由為子著　パイディア出版刊」
▼**上野智子**・「日本のことばシリーズ39　高知県のことば　上野智子編　明治書院刊」
▼**四宮義正**・「徳島科学史雑誌 No.40　四宮義正編　徳島科学史研究会刊」
▼**窮理舎**・「窮理　20号　伊崎修通編　窮理舎刊」
▼**日本歌人クラブ**・「日本歌人クラブアンソロジー2021年版 現代万葉集　日本歌人クラブ編　短歌研究社刊」

4月開催！

花を愛する人の物語
～My Secret Garden～

春を知らせるように咲く庭の花木、慈しむように育てた球根、種から育てた花苗…。土を耕し、植物を育てる時間に、心が癒されていくのを感じる人も多いのではないでしょうか。

1911年に発表されて以降、世界中で読み継がれてきた庭再生の物語、フランシス・ホジソン・バーネットの『秘密の花園』では、心に傷を負った子どもたちが庭を耕し、植物を育てることで笑顔を取り戻し、いきいきと成長していく姿と、色とりどりの花々が咲き誇る花園が鮮やかに描かれています。

「THE GARDEN」Vol.15/1879
ヴィクトリア朝時代の著名な園芸雑誌。
高知県立牧野植物園所蔵

4月9日(土)から開催する企画展「花を愛する人の物語～My Secret Garden～」展では、「『秘密の花園』の世界」「花たちのふるさと～世界で芽吹く花の物語～」「花と暮らす～My Secret Garden～」の3つのテーマで構成し、現代にも通じる癒しの物語『秘密の花園』の世界をご紹介するとともに、『秘密の花園』を起点として、そこに描かれた花々のふるさとをさぐり、それぞれの花々がどのように愛され、どのように描かれてきたのか、原産地やゆかりの国の文学作品を、高知県出身作家の翻訳作品などを交えながらご紹介します。

『秘密の花園』の原書や、19世紀の園芸雑誌など貴重な資料の他、ジャイアントペーパーフラワーアートで室内を彩り、各国の文学作品を楽しんでいただける展示を考えています。また、ヘルマン・ヘッセ、カレル・チャペック、清岡卓行、寺田寅彦など花を愛する古今東西の文学者や、高知が誇る植物学者・牧野富太郎をご紹介する予定です。雨に一喜一憂したり、草木の芽吹きに歓喜する様子に、飾らない人間的な魅力を感じていただけることと思います。

本展を通じて、来館者の皆様が、それぞれの心の「秘密の花園」に咲く花をみつけ、花にまつわる物語を楽しんでいただけましたら幸いです。

（学芸課／岡本美和）

4月以降の企画展ご案内

おしりたんてい

令和4年
7/2(土)～9/4(日)
観覧料：500円(常設展含)

見た目はおしりでも、推理はエクセレントな名探偵が数々の難事件をププッと解決していく大人気児童書「おしりたんてい」シリーズの魅力をご紹介します。

©Troll／POPLAR

寺田寅彦「茶わんの湯」100年 ふしぎいろいろ展

令和4年
9/17(土)～11/20(日)
観覧料：400円(常設展含)

物理学者・寺田寅彦が興味を持ち、探った身近なふしぎを取り上げ、寅彦の視野の広さや作品の奥深さを未公開資料や実験映像などでご紹介します。

©イラスト・コマツシンヤ

生誕120年記念　上林 暁展

令和4年12/1(木)～
令和5年1/26(木)
(※12月27日～1月1日は年末年始のため休館)
観覧料：400円(常設展含)

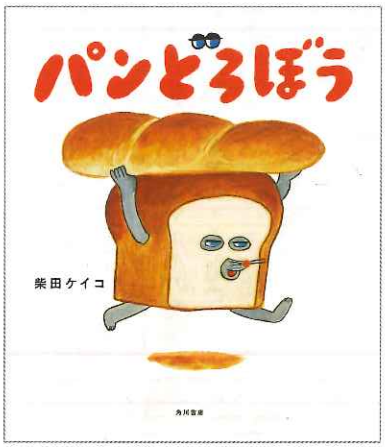
私小説作家として知られる高知出身の上林暁の人と文学をご紹介します。

また、川端康成などの著名な作家の作品を通して、私小説の変遷もご紹介します。

柴田ケイコ展

令和5年
2/4(土)～3/26(日)
観覧料：500円(常設展含)

絵本『めがねこ』でデビューして以来、数々の絵本を刊行し、子どもから大人まで多くの人を魅了し続けている柴田さんの絵本原画を中心にご紹介します。



©Keiko Shibata/KADOKAWA

※新型コロナウイルスの感染状況によって、企画展は内容変更または中止となる場合があります。

ショップより

旅行へ行くと沢山写真を撮るのですが写真の整理が得意ではない、そんな私が旅の思い出作りに欠かせないのが御朱印帳です。神様や仏様との御縁の証であるとともに楽しかった思い出が蘇る大切な一冊になります。

娘が小学生の頃、奈良の東大寺へ行き御朱印を頂こうとお願いしたら「娘さんには『奈良の大仏さん』と書きましょか？」（本来であれば「華厳」など）とユーモアたっぷりにおっしゃってくださいました。そんなエピソードが御朱印帳を開くと思い出され、また奈良に行きたいねと娘と話します。

ミュージアムショップでは開催中の企画展「旅と文学展」に合わせ旅行に是非お持ちいただきたい御朱印帳をご用意しました。歌川国芳、広重の描く表情豊かな猫、コロンとしたフォルムで愛らしい中村芳中の描く仔犬、そして戯画と言えば人気の高い「鳥獣戯画」等どれも個性的で心和む表紙の御朱印帳です。

ご観覧の際は是非ミュージアムショップにもお立ち寄り下さい。

（総務事業課／高塚佐矢子）

館長エッセイ

早春の文学館

早春という好きな言葉に出会ったのは、「早春の港」という半世紀前のヒット曲。潮騒の音で始まる佳曲をご存じの方もおいでではないだろうか。

厳しい寒さの中にも、どこかに春の訪れを感じ始める季節。卒業や入学、就職や転勤、そして退職という人生の節目を間近に、期待と寂しさを胸に過してきた早春。

文学館では、早春の企画展「旅と文学展～旅する高知の作家たち～」を開催中。コロナ禍で旅に出かけにくい昨今、文学作品に記された物語やメッセージに触れて、まずは文学の世界で旅を楽しんでいただき、折を見て現実の旅に出かけてもらえたらとの願いも込めた。展示の中では「誰でも、旅をした後と前とでは、多少とも人間が変るようである。」（上林暁「旅行上手と旅行下手」『文と本と旅と』所収）などの名言もご紹介している。

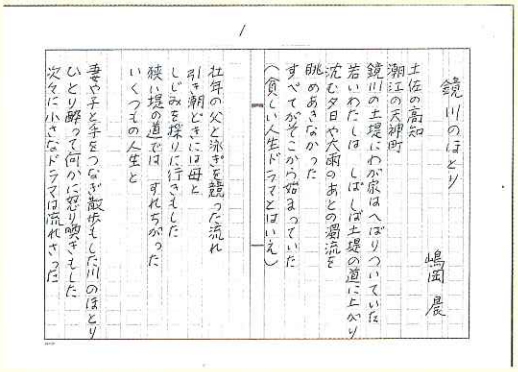
人生は旅だと人は言う。人生という旅を通して、変わる自分と変わらない自分に気づかされることもある。もうすぐ春。好むと好まざるとにかかわらず、上手か下手かもそれぞれに、喜びや心細さを抱えて人はまた旅に出る。旅立つすべての人に幸多からんことを。

（原　哲）

常設展企画コーナー 入れ替えのご案内

嶋岡晨の魅力～「肉化された精神」～

令和4年4月1日（金）～令和5年3月下旬（予定）


鏡川のほとり　嶋岡晨

土佐の高知
潮江の天神町
鏡川の土堤にわが家はへばりついていた
若いわたしは　しばしば土堤の道に上がり
流れ　夕日や大雨のあとの濁流を
眺めあきなかった
すべてがそこから始まっていた
（貧しい人生ドラマとはいえ）

一

壮年の父と泳ぎを競った流れ
引き潮どきには母と
しじみを探りに行きそこした
狭い堰の道では　すれちがった
いくつもの人生と
妻や子と手をつなぎ散歩もした川のほとり
ひとり酔って何かに怒り叫びもした
次々に小さなドラマは流れ去った

嶋岡晨さんは、高知県窪川町志和（現・四万十町）の出身であり、仏文学者、詩人、評論家、小説家、元立正大学文学部教授と様々の顔を持っています。

90歳を迎えた記念の年に、多角的に活躍する嶋岡さんの文学についてご紹介します。

変わる常設展！

令和4年度は、植木枝盛、清岡卓行、槇村浩、山内容堂について新たに入れ替え詳しくご紹介します。

高知県立文学館ニュース 第96号 令和4年3月1日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX 088-871-7857

高知県立文学館 カレンダー

開催中!!

旅と文学展

令和4年(2022)
2月5日(土)～
3月27日(日)

会　場　高知県立文学館　2階　企画展示室
開館時間　午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
観覧料　400円(常設展含む)
長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

工作イベント

オリジナル気球のポップアップカードを作ろう

旅する気分で、気球のポップアップカードを作ってみよう！

日　時	令和4年3月20日(日) ①午前10時～　②午後2時～ ※所要時間は1時間半程度
場　所	高知県立文学館　1階　ホール
参加費	要当日観覧券
申　込	電話または文学館受付にて事前申込 (各回定員25名)

館内おはなしキャラバン

旅のおはなし～紙芝居・絵本～

土佐民話紙芝居と絵本から、旅に関するおはなしをご紹介します♪

日　時	令和4年3月5日(土) 各日午後2時～　※30分程度
場　所	高知県立文学館　1階　こどものぶんがく室 (ホールに変更する場合があります)
演　者	当館カルチャーサポーター
参加費	無料
申　込	不要（当日、直接会場までお越しください。）

旅と文学展クイズ

旅と文学にまつわるクイズに答えて、ポストカードをゲットしよう！

日　時	令和4年2月23日(水・祝)、3月6日(日) 各日午前10時～午後4時
場　所	高知県立文学館　2階　企画展示室
参加費	要当日観覧券
申　込	不要（当日、直接会場までお越しください。）

展示解説

展覧会担当者による展示解説です。

日　時	毎週土曜日　午後1時30分～　※20分程度
場　所	高知県立文学館　2階　企画展示室
参加費	要当日観覧券
申　込	不要（当日、直接会場までお越しください。）

次回開催
花を愛する人の物語 ～My Secret Garden～
令和4年4月9日(土)～6月12日(日)
観覧料：500円(常設展含)、長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

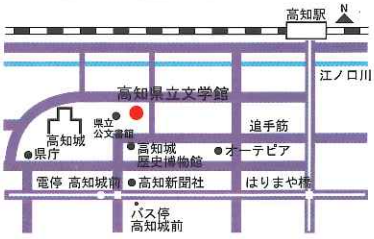
新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組みにご協力をお願いします。
(マスクの着用・手指のアルコール消毒・適切な距離を保っての鑑賞・入館時及びイベント時の検温など)
※新型コロナウイルスの感染拡大状況によって、展覧会及びイベントは内容変更または中止となる場合があります。

高知県立文学館で開催する企画展・その他事業は職員全員で消毒・清掃を行い、安心・安全に利用いただけるよう感染予防・拡大防止対策を行っております。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	常設展一般370円　企画展はそれぞれ異なります。 20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。 身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病手帳又は被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。 (窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室
運営	公益財団法人 高知県文化財団

交通のご案内



●「高知城前」下車、北へ徒歩5分または
(高知駅行)「北はりまや橋」下車、徒歩20分
高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行)
●JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館 検索